

石原邦雄編

## 『家族と職業：競合と調整』（シリーズ家族はいま…5）

ミネルヴァ書房, 2002年12月, xi+305pp.

本書は、家族を取り巻く環境の変化が大きい現代社会において、夫婦関係や親子関係、老後問題、社会病理といった家族に関する諸問題を改めて問い直すことを目的に刊行された研究シリーズの中の一巻として企画されたものである。社会制度や就業構造、価値観、ライフスタイルの変化にともなう、家族生活と職業・労働の関係も大きく変化しつつある。本書は家族と職業という観点から今日の家族が直面している諸問題を再考する手がかりを提供するものである。

序章において編者が各章の概要をまとめているので、その言葉に拠りながら本書の構成を紹介していこう。まず「問題への接近」と題された第Ⅰ部には、家族と職業をめぐる問題へのアプローチとして、ライフコース論、企業社会論、職業移動論・老年学、ストレス論それぞれが展開してきた議論の問題関心と現在の到達点が示されている。次に第Ⅱ部「就業形態と家族関係」では、雇用労働における男女の働き方と家族役割の関係、そして日本の伝統的な就業形態ともいえる自営業・農業における家族労働に関して、質的・量的双方の方法による実証研究が行われている。最後の第Ⅲ部「介在要因としての政策と教育」では、家族と職業の関係を規定する社会的・制度的要因として教育、企業制度、公共政策が取り上げられており、家族と職業、社会制度の関連の実態と今後の展望が論じられている。

本書の特色は、それぞれに学術的蓄積をもつ多彩なアプローチを紹介することによって、家族と職業というともに広範な研究領域に関わるさまざまな問題群を整理するとともに、現代家族を再考する際に手がかりとなりうる具体的な実証研究を豊富に扱っている点である。読者は、まず第Ⅰ部において諸種のアプローチの特色と研究成果を知ることによって家族と職業に関わる諸問題をとらえるための理論的知識を得ることができる。また第Ⅱ部に個別的な家族生活の実態に即した実証研究が、第Ⅲ部では制度や政策といったマクロ要因に関する論考が用意されているので、読み進めるに従って家族と職業をめぐる今日的な問題を把握することができる。巻末に掲載されている注釈入りの文献紹介はこれからこの領域を研究しようという読者にとって大変有用な手引きといえよう。ただし全体の構成として、第Ⅰ部で紹介された問題へのアプローチ方法と第Ⅱ部以降の実証的な論考の間の関連がやや薄いという印象も受けた。紹介されたそれぞれのアプローチに即してデータを分析してみせるパートがあってもよかったように思われる。また、計量分析に関して、172ページのロジット分析で個別の変数の効果は有意であってもモデルのカイ二乗検定が有意ではないこと、215～217ページのクロス表は割合を算出・表記するには母数が少なすぎる点、261・263ページのロジスティック回帰分析の表中にある「df」はおそらく自由度ではないと思われることなどについては、（枝葉末節なことではあるが）読み進める上で気になった。

本書にまとめられている各論文は家族、労働、職業という広範な研究領域を取り結んで問題への接近方法と今日的な問題を提示するという重要な役割を果たしており、「家族と職業という決して新しくはないが、限られた蓄積しかなかった問題領域を確定していくための導的な役割を果たす」（p.ii）という編者の目的は十分に達せられている。本書に引き続き形で今後さらに実証研究の蓄積がなされていくことを期待したい。

(星 敦士)